

第一編

ヴォーリズの来日 近江に理想の郷土を

1905(明治38)年、アメリカから一人の青年ウィリアム・メレル・ヴォーリズが滋賀県立商業学校(現 滋賀県立八幡商業高等学校)の英語教師として招かれた。時は明治維新から約40年、欧米の圧迫に苦しんできた日本が、ロシアの圧力をはねかえし、欧米列強の仲間入りをするべく日露戦争に踏み切った翌年のことだった。

ヴォーリズの志は帝国主義の嵐が吹き荒れる中、「キリスト教による理想の郷土を打ち立てたい」というものであった。

来日2年にして、ヴォーリズは県立商業学校教師の職を失うという苦難にあったが、これにめげず、生涯の友や伴侶を得て、志を実現するために**近江ミッション(近江兄弟社)**の建設に向けて行動を開始した。



商業学校着任当時のヴォーリズ ↑

第二編 近江の兄弟の教育事業 その展開、戦時に耐えて

1920年代は日本の民主主義が高まりを見せ始めた時期であった。いわゆる「大正デモクラシー」の到来である。

教育面でも、明治の国家主義教育から脱し、個人の自主性や個性・自由が重んじられるよう

になった。このころ、近江ミッションはヴォーリズ夫人(一柳満喜子)が中心となって幼児教育を始めた。**近江ミッションの教育・社会事業は多方面にわたり**、これらの事業は国内外からの支援や建築設計業の発展と、メンソレータム販売の好調に支えられて多彩に展開した。

1930年代には、中国大陸で戦火が拡大、日米開戦の危機が迫る中、**近江ミッションは、近江兄弟社と改称**。教育事業も戦時体制の圧力を受けるようになった。

このような時代にヴォーリズは1941(昭和16)年、日本に帰化して**一柳米来留と改名**。戦局が悪化する中で、近江兄弟社の教育部門のいくつかは閉鎖に追い込まれた。



琵琶湖上を行く伝道船ガリラヤ丸 ↑

第三編 戦後の再出発 平和民主の旗を掲げて



最上位に国連旗をかかげた戦後の運動会 ↑↑

1945(昭和20)年8月15日、日本はアジア太平洋戦争に敗れ、戦時体制に終わりを告げた。

その3日後、ヴォーリズは軽井沢から新生近江兄弟社への熱い思いを近江の兄弟らに送った。やがて新憲法に基づく教育制度がスタート。

近江兄弟社の教育部門も、幼稚園、小学校、中学校、高等学校(全日制、定時制)からなる**学校法人近江兄弟社学園(現 ヴォーリズ学園)**と改められ、**民主主義教育の旗手**として再出発した。

1964(昭和39)年、創立者ヴォーリズが病没。その5年後には名誉学園長 一柳満喜子を喪い、学園は新たな試練の時代を迎えることになった。

第四編 創立者没後の近江兄弟社 試練を乗り越えて発展

1970年代、学園は、株式会社近江兄弟社の会社整理によって援助を失い、さらに当時の全国的傾向であった教育困難期の影響を受けて経営危機にみまわれた。

一方、ほぼ時を同じくして、私学への公的助成制度が法制化され、学園は経営危機を脱しつつ、**存続と発展のための試行錯誤**を繰り返した。2005年、ヴォーリズ来日100年を迎え、ヴォーリズ(ウィリアム・メレル・ヴォーリズ)の精神と業績が再評価される中、学園の文化・スポーツ活動や国際交流などの取り組みが成果を見せ始めた。



2007年竣工の学園本館 ↑↑